京都・健康長寿ニュースレター

第17号
京都府健康対策課
健康づくり・企画担当
075－414－4724

認知症・・・

いろいろな原因で脳の細胞が死んでしまったり、働きが悪くなったりしたために様々な障害が起こり、生活上支障が出ている状態のこと。

認知症による物忘れと加齢による物忘れの違いは？

加齢による物忘れ
・・・　忘れている事自体は覚えている
（例）印鑑をどこにしまったか忘れてしまい、探している。
認知症による物忘れ
・・・　体験（経験）自体を喪失している
（例）印鑑をしまった「そのこと自体」を忘れている。

認知症の種類

アルツハイマー型認知症
・・・覚えたことを思い出す能力が低下して新しいことが覚えられない、年月や時刻、自分のいる場所など基本的な情報が把握できないといった症状のほか、不安・うつ・妄想が出やすくなります。
脳血管性認知症
・・・感情の起伏が激しく、意欲や注意力が低下して複雑な作業ができなくなったりします。
レビー小体型認知症
・・・幻視や転倒、手足のふるえ・こわばりを伴い、症状の変動が大きいことが特徴です。
前頭側頭型認知症
・・・がまんや思いやりなどの社会性を失い、ルールを守らないなど周囲への配慮を欠いた行動をとる特徴があります。
その他
・・・クロイツフェルト・ヤコブ病・AIDSなどの感染症やアルコールの影響が原因で認知症の症状が見られることがあります。

認知症の症状

＜中核症状＞

①記憶障害
新しい事を記憶できず、さっき聞いたことさえ思い出せない。
覚えていたはずの記憶も失われていく。

②見当識障害
時間や季節感の感覚が薄れ、迷子になったり遠くに歩いて行こうとする

③理解・判断力の障害
思考スピードが低下して、2つ以上のことが重なるとうまく処理ができなくなる。些細な変化、いつもと違うできごとで混乱し、観念的事柄と、現実的、具体的なことが結びつかなくなる。
（例）倹約は大切と言いながら、高価な羽布団を何組も購入してしまう。

④実行機能障害
同じものを購入したり、料理を並行して進められないなど、計画を立て按配することができなくなる。

⑤感情表現の変化
その場の状況が読めない。周囲の人が予測しない、思いがけない感情の反応を示す。

＜行動・心理症状＞
もともと持っている性格や環境、人間関係などの様々な要因がからみ合って起こる、うつ状態や妄想といった心理

早期の診断と治療が大切です

準備ができる

早期の診断を受け、症状が軽いうちに本人や家族が病気と向き合い話し合うことで、介護保険サービスの利用など今後の生活の備えをすることができます。

治療ができる

認知症を引き起こす病気には早めに治療すれば改善が可能なものもあります。早めに受診をして原因となっている病気の診断を受けることが大切です。

遅らせることができる

原因となる病気(アルツハイマー病や脳こうそく・脳出血など)によって、治療方法が異なります。適切な治療を受けることによって、進行を遅らせることができる場合もあります。

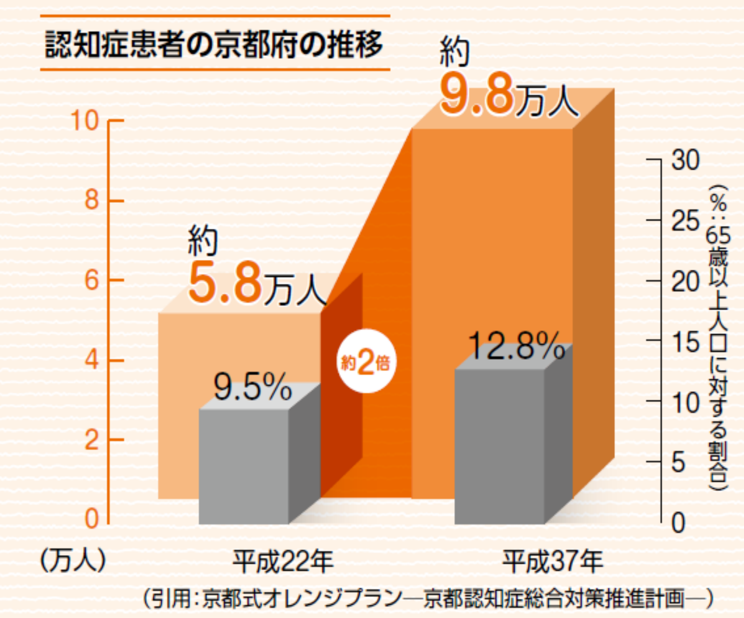
認知症は誰でもかかる可能性のある脳の病気です。

京都府の認知症高齢者※1 は、5万人を超えており、※2 平成37年には約10万人に達すると推計されます。

認知症の人と家族が安心して暮らせるよう一人ひとりが認知症を正しく理解し、地域で支え合っていくことが大切です。

※1)介護保険制度を利用している「認知症高齢者の日常生活自立度」Ⅱ以上の方を指す。

※2)平成22年度国勢調査を基に算出。



お気軽にご相談ください

○電話でのご相談

京都府認知症 コールセンター	京都府が設置している認知症に関する相談ダイヤルです。 0120-294-677

○地域の身近な相談窓口

認知症 あんしんサポート 相談窓口	京都府が設置している身近な相談窓口です。介護の方法等について認知症ケアに習熟した施設職員が個別に丁寧に対応します。
地域包括支援センター	高齢者やその家族を支援するため、市町村が設置している総合相談窓口です。

「おかしい」と思ったら、「歳のせいかな」と考えて放置することなく、早めに相談に行ってみましょう。

(2015年9月発行)